

# 森の家

ある まずしい木こりが、おかみさんと三人のむすめといっしょに、さみしい森のはずれの 小さな小屋にすんでいました。

ある朝、木こりは、いつものように 仕事にしようとして、おかみさんにいいました。

「わしのべんとうを、上のむすめに 森のなかまで とどけさせてくれ。そうしないと、仕事がおわらないからな。むすめが 森でまよわないように、わしは、キビをひとふくろもって行って、道みち まいていくことにしよう。」

お日さまが 森の上にかかるころ、上のむすめは、スープの いっぱいはいったはちをもって、でかけました。

けれども キビは、はたけのすずめと 森のすずめ、ひばりと あとりと つぐみと



ひわが、とつくに たべてしまっていたので、お父さんがどこへいったのか、わかりません。そこで、上のむすめは うんを天にまかせて、どんどん あるいていきました。

そのうち、お日さまがしずみ、夜になりました。くらいなかで、木が ザワザワゆれ、ふくろうが しゃがれ声でなきます。上のむすめは、だんだん こわくなりました。

そのとき、とおくに 明かりがみえました。木ぎのむこうに、チラチラ ひかっています。

(あそこに だれかすんでいるわ。きつと、ひとばん とめてくれるでしょうよ。)

上のむすめは、そう かんがえました。そうして、明かりにむかって いそぎ、まもなく 小さな家のまえにきました。まどが あかるくかがやいています。

むすめが とびらをたたくと、なかから しわがれた声がさげびました。

「おはいりー」

上のむすめは、くらい土間に はいっていき、居間のとびらを たたきました。

「いいから おはいりー」

また、声がありました。上のむすめが とびらをあけてみると、なかには、まっしろなし

らが頭のおじいさんが ひとり、テーブルに りょうひじをつき、りょう手で あごをさ  
さえて、すわっていました。白いひげが、テーブルのむこうがわから たれさがって、ほ  
とんど ゆかにつきそうです。ストーブのそばに、三びきの動物が うずくまっています  
た。めんどりが一羽、おんどりが一羽、それに、まだらの め牛が一同です。

上のむすめは、どうして ここへ きたかをはなして、ひとばん とめてほしい、とた  
のみました。

すると、おじいさんはいいました。

「きれいな めんどり、

きれいな おんどり、

それからおまえ、きれいな まだらのめ牛や、

おまえたちは どうおもうね？」

「ドゥクスー！」と、動物たちはこたえました。

それは どうやら、「ええ、かまいませんよ。」という、へんじでした。というのも、おじいさんが、こう いったからです。

「この家には、なんでも たっぷりある。かまどのところへ行って、わしらに 夕食をつくっておくれ。」

上のむすめが 台所<sup>だいどころ</sup>にいったみると、なんでも たっぷりあったので、おいしいりょうりを つくりました。

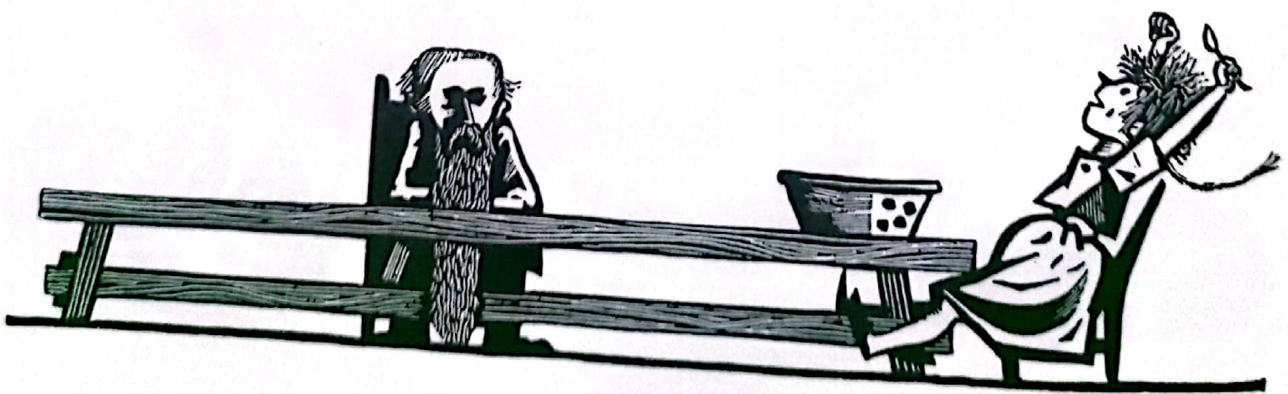
けれども、動物たちのことは、かんがえてやりませんでした。むすめは、りょうりを たっぷりもったはちを、テーブルにはこび、しらがのおじいさんと おなじテーブルについて、たべはじめました。

おなががいっぱいになると、むすめはいいました。

「ああ、つかれたわ。わたしのねどこは どこかしら。

わたし、どこにねればいいのか?」

動物たちがいました。



「あんたは おじいさんとたべた、

あんたは おじいさんとのんだ、

わたしたちのことは、これっぽっちも かんがえてくれなかったね。

だから、じぶんのねどこは じぶんでおさがし。」

すると、おじいさんがいいました。

「かいだんをあがりなさい。上のへやに ねどこがふたつあるから、まくらをよくふるって、白い<sup>しろ</sup>しきふをしきなさい。わしも そこへいって ねるから。」

上のむすめは かいだんをあがり、ふたつのねどこの まくらをふるって、しきふをしきおえると、あとは もう おじいさんをまたずに、さつさと、ねどこのひとつに もぐりこみました。

しばらくすると、しらがのおじいさんがやってきて、明<sup>あ</sup>かりで むすめをてらしたし、頭<sup>あたま</sup>をふりました。そうして、むすめが ぐつすり ねむつ



ているのをみると、おとし戸をあけて、むすめを、地下室におとししまいました。

木こりは、夕方おそくなつてから 家にもどり、おかみさんをせめて、おまえのおかげで、一日じゅう はらをすかせたままだつた、といいました。

すると、おかみさんはこたえました。

「わたしのせいじゃないよ。上のむすめは、べんとうをもつて でかけたもの。あの子は、きつと まよつてしまったんだ。あしたになれば かえつてくるよ。」

夜があけるまえに 木こりはおきだし、森にいこうとして、こんどは、なかのむすめにべんとうを とどけさせることにしました。

木こりはいいました。

「レンズ豆をひとふくろ もつていこう。レンズ豆なら キビより大きいから、みつげやすい。あの子も まようことはないだろう。」

お昼になるころ、なかのむすめも、べんとうをもつて でかけました。

けれども、レンズ豆はありません。森の小鳥たちが、きのうとおなじように、ぜんぶ

ついでに、すみません、ひとつぶものこっていませんでした。

なかのむすめは、森のなかを あちこち まよいあるき、夜になるころ、上のむすめとおなじように、おじいさんの家に たどりつきました。そうして、おはいいり とよびかけられて なかにはいり、たべものと ねどこをたのみました。

白いひげのおじいさんは、また、動物たちにききました。

「きれいな めんどり、

きれいな おんどり、

それからおまえ、きれいな まだらのめ牛や、

おまえたちは どうおもうね？」

動物たちは、こんども「ドウクス！」と、こたえ、なにもかも、きのうの夜とおなじようになりました。

むすめは おいしいりょうりをこしらえ、おじいさんといっしょに、たべたり のんだ

りしましたが、動物たちのせわは してやりませんでした。

むすめが、じぶんのねごは どこなの、ときくと、動物たちはこたえました。

「あなたは おじいさんとたべた、

あなたは おじいさんとのんだ、

わたしたちのことは、これっぽちも かんがえてくれなかったね。

だから、じぶんのねごは じぶんでおさがし。」

むすめがねむってしまつと、おじいさんがやってきて、頭をふりながら むすめをみつ

め、地下室におとしました。

三日めの朝、木こりは おかみさんにいいました。

「きょうは、すえむすめに べんとうをとどけさせてくれ。

あの子はいい子で、いつも すなおだから、上のふたりの





ように 道みちをはずれて、どこかへ まよいこんだりしないだろう。まったく あのふたり  
ときたら、マルハナバチみたいに、そわそわ おちつかないんだから。」

おかみさんは 気がすすまなかつたので、いいました。

「あたしや、いちばんかわいいがつている あの子まで、とりあげられちまうのかい？」  
すると、木こりはこたえました。

「しんぱいするな。あの子は まよったりしないさ。あの子は、かしこい もののよくわ  
かる子だからな。そのうえ、おれは エンドウ豆まめをもつていつて、道みちにまいておこう。エ  
ンドウ豆まめなら レンズ豆まめより大きいから、道みちをまちがえることはないよ。」

けれども、すえむすめが、かごを手に て にかけてみると、森もりのはとたちが、とつくに  
エンドウ豆まめを、おなかに おさめてしまっていました。

むすめは、どこへいけばいいか わかりません。

(わたしがいなくなったら、かわいいそうなお父さんは、どんなに おなかをすかせるだろ  
う。お母さんは、どんなに なげくだろう。)

と、そればかりかんがえて、すえむすめは、とても しんぱいになりました。



あたりがぐらくなりはじめたころ、むすめは、とうとう  
明<sup>あ</sup>かりをみつけ、森<sup>もり</sup>の<sup>いえ</sup>家にやってきました。そうして、と  
ても ていねいに、ひとばん とめてください、とたのみ、  
白<sup>しろ</sup>いひげのおじいさんは、また 動物<sup>どうぶつ</sup>たちにたずねました。

「きれいな めんどり、

きれいな おんどり、

それからおまえ、きれいな まだらのめ牛<sup>うし</sup>や、

おまえたちは どうおもうね？」

「ドゥクス！」動物<sup>どうぶつ</sup>たちはこたえました。

すえむすめは、ストーブのそばの 動物<sup>どうぶつ</sup>たちにちかづき、

めんどりと おんどりの つやつやした羽<sup>はね</sup>を、手<sup>て</sup>で そつ

と なでてやりました。まだらのめ牛<sup>うし</sup>の つののあいだも、

かるく さすってやりました。

それから、おじいさんにいわれたとおり、おいしいスープをこしらえました。

スープのはちを テーブルにのせると、すえむすめはいいました。

「わたしだけが おなかいっぱいたべて、かわいい動物たちは なにももらえないなんて。

外には なんでも いっぱいあるから、まず、動物たちに えさをやりましょう。」

そうして、オオムギをとってくると、めんどりとおんどりに まいてやり、め牛には、

いいかおりのする ほし草を、うでいっばいに かかえてきてやりました。

「さあ、おいしくおたべ、かわいい動物たち。

のどがかわいたら、くみたての水もあるからね。」

すえむすめはいい、バケツ一ぱいの水を はこんできました。めんどりとおんどりは

バケツのふちにとびのり、鳥たちが水をのむとき やるように、まず くちばしを水につ

っこみ、それから 頭をあげました。まだらのめ牛は、ぐぐーっと ひといきに のみま

した。

動物たちが えさをたべおえると、すえむすめは おじいさんのテーブルにつき、おじ

いさんが むすめのためにのこしておいたものを、たべました。

まもなく、めんどりとおんどりは つばさの下に頭あたまをかくし、まだらのめ牛うしは 目をし  
ばたたきはじめました。

そこで、むすめはいいました。

「さあ、やすむことにしましょうか？」

きれいな めんどり、

きれいな おんどり、

それからおまえ、きれいな まだらのめ牛うしや、

おまえたちは どうおもう？」

動物どうぶつたちはこたえました。

「ドゥクスー！」



あなたは わたしたちとたべた、

あなたは わたしたちとのんだ、

あなたは わたしたち みんなのことを、かんがえてくれたね。

だから おやすみ、やすらかに。」

そこで、すえむすめは かいだんをのぼり、羽まくらを よくふるって、白いしきふをしきました。そうして、なにもかも ととのえおえると、おじいさんがやってきて、ねどこにはいりました。白いひげが、足もとまでとどきました。すえむすめは、もうひとつのねどこに はいり、おいのりをすませてから、ねむりました。

むすめは、そのまま、まよなかまで ぐっすり ねむりつづけました。ところが まよなかになると、家のなかが ひどく さわがしくなったので、むすめは目をさましました。へやのすみずみが、メリメリ、バリバリ、と音をたて、とびらは バタン とひらいて かべにぶつかり、たる木は ミシミシ ゆれて、つぎ目がはずれそう。かいだんは ぐず

れおちそうでした。

そうして さいごには、まるで、やねぜんたいがおちてきたように、バリバリ とも  
のすごい音がしました。けれども、そのあとは しん として、もの音もしなくなり、す  
えむすめは、けがひとつ していませんでした。

そこで むすめは、しずかに よこになり、また ねむりました。

よく朝、あかるいお日さまのひかりで 目をさましたむすめは、いったい なにをみた  
でしょう？

むすめがねていたのは、大きくてりっぱな へやのなかでした。まわりじゅうが、まる  
で、王さまのへやのように かがやいています。かべには、みどりの きぬの地にかいた  
金いろの花が、ずっと 上まで さいていました。ねごこは ぞうげでつくってあり、上  
がけは 赤いピロードです。そばの 小さなすの上には、しんじゆをぬいとりしたくつ  
が そろえてありました。

すえむすめは、これは ゆめだわ、とおもいましたが、そこへ、三人の りっぱなおし  
きせをきたためしつかいが はいってきて、ごようはなんでしょうか、とたずねました。

むすめはこたえました。

「なにもないわ。わたしも すぐおきて、おじいさんに スープをつくってから、めんどりと おんどりと まだらのめ牛うしに、えさをあげましょう。」

むすめは、おじいさんは もう おきているだろうとおもって、となりのねどこをみました。すると そこには、おじいさんではなく しらない男の人がねています。わかくきれいな人でした。

むすめが、じっと みてみると、男の人は目をさまし、体からだをおこして、いいました。

「わたしは王子おうじです。わるいまじよの まほうにかけられて、まっしろなしらあたまが頭の ろうじんにされ、森もりのなかでくらしていました。わたしのそばにいられたのは、たった三人のめしつかいだけで、それぞれ、めんどりと おんどりと まだらのめ牛うしに されていたのです。

わたしのまほうが とけるためには、気きだてがよくて、人間にんげんだけでなく 動物どうぶつたちにも やさしくしてくれる、わかいむすめが やってこなければなりませんでした。それが あなただったのですよ。あなたのおかげで、夕べゆうのまよなかに わたしたちはすぐわれ、ふ

るい森の家は、また もとどおり、わたしのきゆうでんになったのです。」

王子とむすめは、ねどこからでました。王子は 三人のめしつかいをよび、馬車をしたてて、むすめのお父さんとお母さんを、けっこんしきのおいわいに よんでくるように、とめいじました。

「ところで、わたしの ふたりのねえさんたちは、どこにいるんでしょう？」  
すえむすめがきくと、王子はこたえました。

「あのふたりは、地下室にとじこめてあります。あすの朝、あのむすめたちは 森につれていかれて、ある炭やきの家で、下ばたらきをしなければならぬのです。

心をいれかえて、かわいそうな動物たちが おなかをすかせていても、ほうつておかなくなるまでね。」